

親鸞の生涯

卷之三

〔改邪鈔〕(ダイジヤシヨウ) (三代覺如著) に、「聖人つねのこ持言」として

「おののおの十余ヶ国の境を越えて身命を顧みずして尋ねきたらしめ給う御志し、ひとえに往生極楽の道を問い合わせ聞かんがためなり。しかるに念佛よりほかに往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんと心にくくおぼしめしておわしましてはんべらんは大きなる謂りなり。もししからば、南都北嶺にもゆゆしき学生たち多くおわせられて候うなれば、彼の人々に逢い奉りて往生の要よくよく聞かるべきなり。親鸞におきては、ただ念佛して弥陀に助けられまいらずべしと、よき人（法然さま）の仰せをかうむりて信するほかに別の子細なきなり。」（歎異抄）

「たとい牛盗人と言わるとも、もしくは善人もしくは後世者、もしくは仏法者とみゆるよう振る舞うべからず」

からは、法然さまの教えの鑑仰者、念佛の信心者として生きたのであった。

(教信はもと奈良興福寺の因明(論理学)の學僧であつたが後すべてを捨てて加古川の河わたし人夫となり、つねに南無阿弥陀仏のみ名を唱えつつ終には孤独死した。教信寺の祖

火や地震。飢饉が頻繁におそっていたから親鸞一家もあちこち居を移さざるを得なかつた。妻「恵信尼」も、親鸞八十歳ころには子女をつれてふるさと越後へ帰つていった。孫娘「覚信尼」の世話になつてくらした親鸞の最晩年は、しかし「信心昧得」の多忙な日々が続いた。

た。一時は、教導者、教化者、先生という立場に絶望と「いやけ」がさし、その放棄につとめ

だ。というものは帰京後の親鸞のもとへ、ひつきりなく関東から質問が来る。それは関東に残した弟子集団の間の対立からでてきた論争であった。「一念多念」「造惡無碍」一即得往生」などなど。おあじわいを理論化して、ご法義を理論理屈のうえで対論しようとするの

先ず、師法然さまをあらためて仰ぎ見る。

①「西方指南鈔」（法然の事蹟や法語）の編纂し改めて師徳を鑽仰（八十五歳前後）

②師法然さまから受け継いだ眞実の仏教を『顕淨土真実教行証文類』として六巻の書にまさめて後世に伝えること。

③法然門下の先輩諸師の残された書物の味読『唯信鈔文意』『一念多念文意』『自力他力事』などに自ら学び同行と歎びうこと。

④多くの和讃をつくり民衆と唱和し念佛称名の日々であった。（若い親鸞は比叡で「声明贊歌」を専門的に習得していた）

れて 魚にあたうべし」（改邪鈔）

2、ハ十六歳（正嘉二年十一月）高田の靈智に与えた法語。『自然法爾章』とよばれる文章。

九月 長月 のこよみ

二日(木)	朗誦「アスナロ」(録音)
十日(金)	福成寺大遠忌打ち合わせ
十一日(土)	山田 慎氏宅法事
十二日(日)	出石中運動会
十五日(水)	吉祥寺十七回忌法事 出石組基準

福成寺大遠正法要
二十六日 みのりを聞く会
三十一日(木) 朗読アスナロ(編集)

臨終には弟尋有と末娘覺信尼、子ども益方入道がみとった。翌二九日の葬送の儀には高田の顯智など遠くから弟子も駆けつけた。三〇日には遺骨を拾い鳥辺野の北大谷に掩墓を築き納骨した。

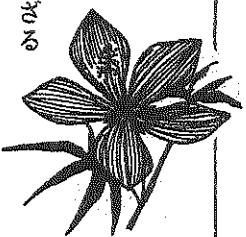
八月十七日	口小谷
葬	儀
宮鶴	美重子
八月二十三日	正法寺
數森	さま
好文	さま
さま	九十歳
七十五	七十五



この當みのなかで親鸞の最後に到達したおみのり。遺言とみてもよいもの

地藏盆

村のはずれの
お地蔵さんは
いつも にこにこ 見てござる



子どものころ、夕焼けこやけの道を帰るところ道端のお地蔵さまに、ちょっとお辞儀をして、それから家路を急いだものでした。数あるみほとけさまのうちでいちばん身近なお方がありました。

そのお地蔵さまの盆のおまつり（地藏盆）が八月二十三日です。

町のおばさんがたが、朝はやくからかってお地蔵さまを赤い毛氈の段のうえに飾ってくれます。お花やいろいろなお供え物が供えられて、夕方からは鐘をたたいて声をそろえてご詠歌などもあげられます。こどもたちがお参りするとお供えのお菓子が一杯戴けました。こどもたちは町中あちこちのお地蔵さまにお参りして、袋いっぱいにお菓子をもらいました。

なんでも、お地蔵さまというのは、特にこどもたちを見守っていてくださる仏様だそうです。

お地蔵さまが、このように祀られるようになつたのは鎌倉時代からです。

『地蔵菩薩本願經』などによると、お釈迦さまがなくなつて、次の弥勒というほへとけさまが出られるまでの暗い五十六億七千万年のあいだ、暗い悲しい世の片隅から、じつと苦悩の私を見守つてくれる菩薩さま。それが地蔵様。

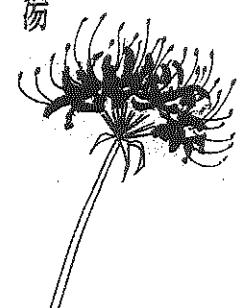
菩薩というのはボジソワカといつてほとけさまになるため修行にいそしんでいるお方。いくら泥をかけられても虐げられても道端にたつて人の苦難をともにしよう。それが成就しなければ「ほとけ」にはなりませんと誓つて、地の底から私を見守つてくださる方です。

仏教のうち「大乗」仏教といつて、自分のことよりも人を救うこと願う「本願」を説く仏さま。法藏菩薩・地藏菩薩などなど。

このもののころの悲しさも、大人になって苦しい毎日も、南無阿弥陀仏のお念仏のなかから、法藏菩薩さま・地藏菩薩様・十方無量の諸仏に見守られ呼ばれていたわたしであつたことをありがたくしおびましょう。

地藏盆は八月の二三日です。

一升の熱湯物



ナガールジュナ（龍樹菩薩）という人は、2000年以上の昔、あのインドにいた偉い人だから、実際に自分が見聞きしたことを言っているに違いありません。

四〇里四方もある水の山。この巨大な水の山を溶かそうとして、一升の熱湯を用意してヒマラヤに挑んだ人がいた、が、なんと、一升の熱湯をブッかけたところ、わずかの範囲の水は溶けたように見えたが、一夜明けて驚いた。前よりも大きな氷の柱がそこにはできていた。

人を救つてあげよう、教え育ててあげよう愛してあげよう。

こういう慈悲のこころや愛の行為は称賛されるべきです。ボランティアのこころも讃えられなければなりません。

しかるにその善意情熱をそいだら、一時は成功したように見えるが、ついには、反感をかって、につもさつちもいかなくなってしまう」という話。

つまり、「一升の熱湯」とは、わたしのここの熱い愛の情熱で、助けてあげるのだ、救つてやるのだと言う、夏目漱石さんが指摘する「無意識な偽善家」。知らず知らずに落ちている「独りよがりの先生づら」です。

愛していたつもりが憎しみに理解していたつもりだったのにとんだ思い違いだったわ！

愛し合っていたはずの夫婦の破綻

可愛がってやつていたはずの親子のいかみあい

現代はやりの人間関係のゆがみを、2000年まえのナガールジュナさん。見抜いてい

虫心

春秋ヲ知ラズ

中国の有名な古典『莊子』の冒頭にある言葉です。

「朝菌は晦朔ヲ知ラズ」（朝方わずかの時間生え出るきのこは、月初め・月末のことなど感知しない）

これと対句してのことばがあります。

「夏のわざかな時間を懸命になくツクツクボウシと呼ばれる夏蝉は、夏、この季節だけを生きているのであって、春のこと秋のことなど全く関知しない」

夏の蝉にとつては、一日のその短い時間が全人生。またその時間の窓から見た世界だけが全て。

わたしの人生八十五年。

その八十五年が、今まさに消えようとしている。

消え行くその命を、回顧し、名残をおしみ、ときには誇らしくおもったり、また躰を嗜む思いに苛まれたり。総じて自己本位。自己中心的な「わがもの顔」の一生であつたことを今になつて悲しく思う。「虚偽不実のわがみ」と親鸞さまが指摘くださった通り。

その一生の幕が下りる。

この期におよんでも、ありし日の毀譽褒貶いろいろな思い出にしがみつこうとして、そこから手が離れない。

「まことによくよく煩惱の興盛に候こと」

歎異抄

夏の蝉のあの力いっぱいの声は、なにを訴えているのか。越し方人生の謳歌なのか、それとも惜別のか。凋落悲哀の蝉の声に懺悔の深淵に吸い込まれる。

如来さまって、それは何？
タットハガーター。如ヨリ来生ス。
眞実からのはたらきかけ。。

夏の蝉の命は、夏の日の短い時間ではあったが、それを育みそだてた春秋一年をとおした影響力（はたらきかけ。ねがい）が「見えないけれども」あつてのこと。

数勘定はするな。

文字や言葉で把握しようとするな

如来さまのお呼びかけおりナムアミダブツと応答しようではないか。

影響力（はたらきかけ。ねがい）が「見えないけれども」あつてのこと。

数勘定はするな。

九月一十一日 午後2時より
彼岸会法要

夕焼けこやけの残照も山のお寺の鐘の音
お淨土からの声と鐘の響きのなかで
からすもいつしよにかえりましょ
おててつないでみな帰えろ

夕焼けこやけの残照も山のお寺の鐘の音
お淨土からの声と鐘の響きのなかで
カラスも人も、大人もこどももいつしょに
やがて帰る世界をお彼岸のこの日に考えて
みるそんな集会がもてたらと思ひます。

